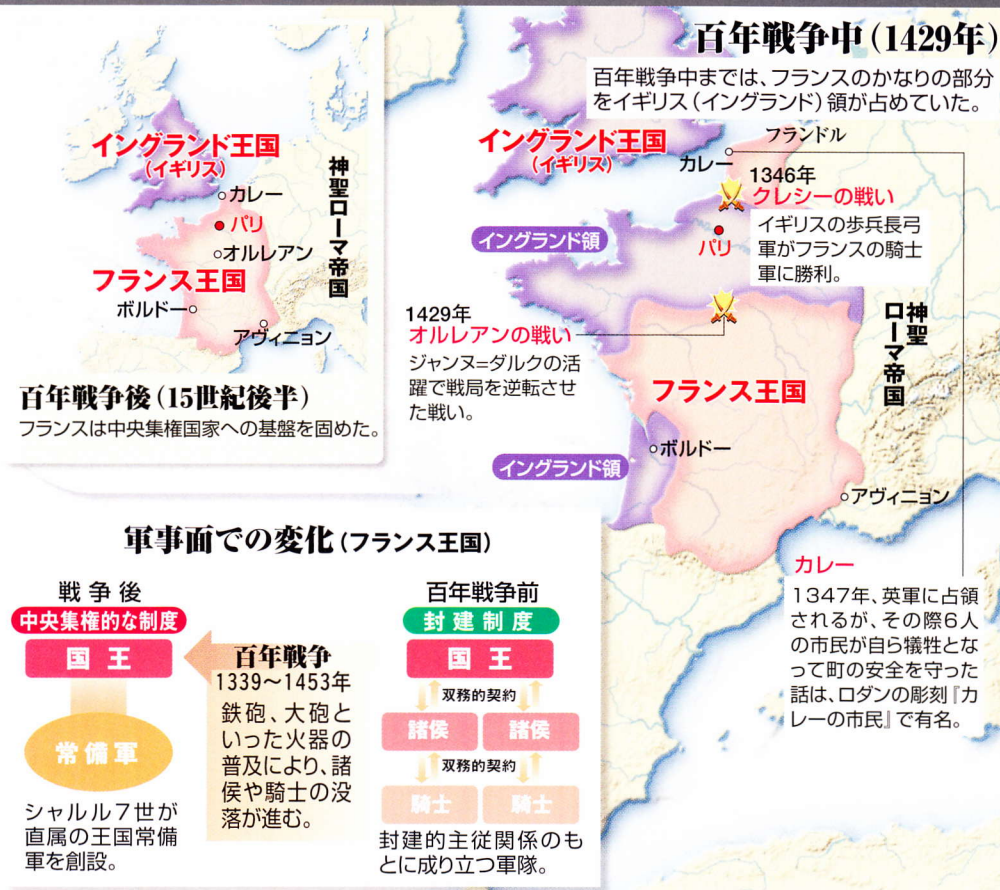


百年戦争で強化された英仏の王権

百年戦争によって起きた変化(フランス王国)



1339年
1453年

断続的に100年以上続いた英仏間の戦争は、結果として王権の強化につながり、中央集権国家への道を用意した。

王位継承と領土問題に端を発した百年戦争

中世のイギリス・フランス両王国は、大陸内のイギリス領土や、英国産羊毛の重要な輸出先で毛織物工業のさかんなフランス地方の支配権をめぐって、対立を深めていた。そんな折、フランスのカペー朝が途絶え、傍系であるヴァロア朝のフィリップ6世が即位すると、カペー家の血を引くイギリスのエドワード3世はフランス王位の継承権を主張し、1339年にフランスへ侵攻。のちに百年戦争とよばれ、断続的に100年以上続く戦争が始まった。

戦況はイギリスの優勢が続ぎ、フランス国内はベストの流行P76参照やジャックリーの乱なども重なって、混乱状態に陥った。しかし1429年、神のお告げを受けたと信じる農民の娘ジャンヌ=ダルクが先頭に立ち、イギリス軍によるオルレアンの包囲を破ると、形勢は一気に逆転。勢いづいたフランス軍はシャルル7世に率いられ、カレーを除く大陸内の全領土を確保して、53年、戦争はようやく終結した。

百年戦争による王権の強化

百年戦争後、イギリスの勢力を大陸から一掃したことで、シャルル7世の下、フ

ランスの王権は強化された。

一方、イギリスでは百年戦争後の1455年にランカスター家とヨーク家による王位継承争いが起き、バラ戦争とよばれる内戦に発展した。結局、ランカスター家の傍系であるヘンリー7世がテューダー朝を開き内戦は終息するが、長年の戦乱で諸侯や騎士の没落が進み、イギリスでも中央集権的な王政確立への足場が築かれることとなった。

また、百年戦争ではイスラーム世界から伝えられた鉄砲や大砲などの火器が威力を発揮したが、こうした戦法の変化により騎士は戦場の主役ではなくなり、以後、没落に拍車がかかることとなった。

ヨーロッパを吹き荒れた魔女狩りの嵐

魔女狩りとは、おもに16世紀から17世紀にかけてヨーロッパでみられた宗教上の異端迫害を指す。1431年に火刑に処されたジャンヌ=ダルクも魔女として処刑されたといわれるが、正確には魔女裁判ではなく、彼女の「神の声を聞いた」との主張を問題視した宗教裁判であった。

本格的な魔女狩りの時代は1486年、ドイツの異端審問官が『魔女の鉄槌』という書物を出版したことに始まるとされ、その後17世紀にかけて、魔女狩りの嵐がヨーロッパを吹き荒れた。飢饉や疫病、災害などが、何らかの悪意をもったもの、つまり悪魔によって引き起こされるという考えは古くからあったが、それが宗教上の異端審問と結びつき、一種の集団ヒステリーにエスカレートしていったのである。

魔女狩りは、18世紀の啓蒙思想の普及により、終息する。

Key Word

騎士

中世ヨーロッパの騎馬戦士。その身分は封土とともに世襲される封建領主でもあった。武勇と忠誠を徳とした騎士の行動規範は、騎士道とよばれ尊ばれた。騎士が戦場でまとう鎧(よろい)は総重量が60~80kgにも達し、動きが鈍重な騎士は次第に軍事的な存在意義を失っていく。さらに百年戦争では、火器や傭兵が普及したことでその傾向は決定的となった。